【原著】

大学入学時と卒業時における学生の「質」と選抜方法の評価

林寛子（山口大学）

山口大学ではアドミッション・ポリシーと選抜方法の整合性を検証するため，入学者の追跡調査を入試に始まり，入学時の意識，在学中の学業成績や生活態度，卒業時の意識・満足度に至るまで，学生が大学で成長していく多様な実態を一貫して把握する手法で実施している。本報告はデータの蓄積段階における予備分析として，経済学部を取り上げ，入試成績，在学中の学業成績，諸活動と自己評価の意識との関連を分析し，学部レベルの詳細な特徴を把握するとともにアドミッション・ポリシーの検証の方向性を探るものである。

1 はじめに

山口大学は大学全体で求める学生像と学部が求める学生像をアドミッション・ポリシーとして示し，大学入試を実施している。このアドミッション・ポリシーには，意欲や資質・能力が示されている。意欲や資質・能力は抽象的であり，評価，測定することは容易ではない。しかし，アドミッション・ポリシーを掲げて入試を実施している以上は，アドミッション・ポリシーに掲げた学生を獲得できたのかどうかの検証が必要であろう。

山口大学ではアドミッション・ポリシーと選抜方法の整合性を検証するため，2009（平成21）年度から入学者追跡調査の一環として，入学時と卒業時に全学生を対象として学生の実態と意識を把握するアンケート調査を学籍番号の記入を求めるかたちで行っている。学籍番号を求めるのは，入学時と卒業時の調査を対照させるだけでなく，入試成績，在学中の学業成績等とも結び付けるためである。

この追跡調査の手法は，2006（平成 18）年度から実施していた全入学者，全卒業者を対象とした学籍番号を求めないアンケート調査を基に，入学時と卒業時の調査の質問及び回答方法等の統一を図り，設計しなおしたものである。新たな追跡調査に基づくデータは平成 25 年 3 月に 1 学年分が完成し，現在はデータの蓄積段階[1]である。

データの蓄積段階であるが，大学全体のデータを用いたこれまでの予備分析では，卒業時の「学業成績」，在学中の「諸活動」，卒業時の「意識」の関連として，GPA 等の「学業成績」の高さ，大学に対する満足度や自己評価等の「意識」の高さは，大学在学中の授業以外での「諸活動」への参加が一つの要因になっていることが明らかになっている。このことから，入試において大学で「諸活動」に参加しようとする意識や参加経験の有無等をアドミッション・ポリシーにおいて求めることは有効であると言える（林，2012）。

この結果を踏まえた上で，本報告では，2007（平成 19）年度入学者のうち経済学部の学生を対象として，入試においてアドミッション・ポリシーに掲げた学生を獲得できたかどうかの予備分析を学部レベルで試みる。特に，経済学部の前期日程による入学者の入試成績から卒業時の学業成績に至る変化を分析し，大学教育において資質・能力を十分に伸ばすことができる人材，及びアドミッション・ポリシーの検証の方向性を探る。

2 アドミッション・ポリシーと分析対象者

経済学部は，前期日程，後期日程，センター試験を課さない推薦入試Ⅰ，センター試験

を課さないAO入試の4つの選抜方法により入学者を選抜している。アドミッション・ポリシーは表1のとおりで，6つの項目のうちどれかに該当することを求めている。このアドミッション・ポリシーは全ての選抜方法に共通であるが，AO入試だけは表1の内容に加えて，表2の内容も求められている。

表1　経済学部のアドミッション・ポリシー

①真に人間的な平和・幸福・豊かさを探求し，公正・公平を追求する心を持った人

②国や地域を越えた多くの人々との出会いを大切にし，国際社会や地域社会に貢献したいと思っている人

③経済社会における諸問題に関心を持ち，経済学関連分野で能力を発揮したい人

④経済学・経営学・法学等を学ぶ上で必要となる幅広い基礎学力を持っている人

⑤入学目的を明確に持ち，自ら問いを見いだし，自分の頭で柔軟かつ論理的に考え，他人の意見を尊重しつつ，率直に議論・対話のできるリーダーシップにあふれた個性的な人

⑥総合的な視野で現代社会の諸問題を考察し，高度専門職業人等を目指す人

表2　経済学部のAO入試のアドミッション・ポリシー

リーダーシップにあふれ，経済・社会について強い関心がある人。中でも，
（1）集団をまとめるような経験をしたことがある人
（2）入学目的が具体的かつ明確な人
（3）卒業後の進路が明確な人
（4）学習意欲が旺盛でチャレンジ精神がある人
（5）これだけは誰にも負けないという何かがある人
（6）理解力・表現力に優れ，人前でも堂々と自分の意見を言える人

本報告では，予備分析として，2007（平成19）年度経済学部入学者のデータを用いて分析する。用いるデータの詳細は，入試成績（前期日程のみ），在学成績，卒業時の意識調査データを用いる。以上のものは，学籍番号を用いてデータを一致させることができている。なお，2007年度入学者の入学時調査は学籍番号の記入を求めない方法で実施した時期のものである。データを学業成績等と一致させることができないが，入学時の特徴を把握するために入学時の意識調査も資料として用いる。2007年の経済学部全体の入学者は410人であった。そのうち309人が4年間で卒業した。このうち，その他の選抜方法を分析の対象から除外し，308人を分析対象者とする。学籍番号を求めた卒業時調査の回収票は302票で全て在学成績とデータを一致させることができた。また，前期日程による入学者は261人，そのうち198人が4年で卒業し，卒業時調査の回収票は194票であった（表3）。

表3 分析対象学部の卒業時調査の回収状況

	全体	前期日程	後期日程	推薦Ⅰ	AO	その他
入学者	410	261	53	74	20	2
卒業者(分析対象者)	309	198	39	56	15	1
卒業時調査回答者	302	194	38	54	15	1
卒業時調査回答なし	7	4	1	2	0	0

注）その他は選抜方法別分析の場合は欠損値として扱う。

3 卒業時の学生の「質」と前期日程の評価

3.1 在学中の学業成績と卒業後の進路

まず，選抜方法別に学業成績について見る。学業成績は各学年において履修した全ての科目のGPA[2)]と4年間全体のGPA（以降，全体GPA）を用いる。選抜方法別の学業成績は表4のとおりである。

1年GPA, 2年GPA, 3年GPA, 4年GPA, 全体GPAは選抜方法別の有意差は見られない。つまり，選抜方法は在学中のGPAに関連しないと言える。

表4　経済学部の選抜方法別GPAの平均

		度数	平均値	F 値	有意確率
1年GPA	前期日程	198	2.68	2.052	.107
	後期日程	39	2.66		
	推薦Ⅰ	56	2.64		
	AO	15	2.98		
	合計	308	2.68		
2年GPA	前期日程	198	2.49	1.253	.291
	後期日程	39	2.54		
	推薦Ⅰ	56	2.42		
	AO	15	2.78		
	合計	308	2.50		
3年GPA	前期日程	198	2.49	.977	.404
	後期日程	39	2.56		
	推薦Ⅰ	56	2.56		
	AO	15	2.84		
	合計	308	2.53		
4年GPA	前期日程	198	2.97	.902	.441
	後期日程	39	3.08		
	推薦Ⅰ	56	3.13		
	AO	15	3.38		
	合計	308	3.03		
全体GPA	前期日程	198	2.66	1.415	.238
	後期日程	39	2.71		
	推薦Ⅰ	56	2.69		
	AO	15	2.99		
	合計	308	2.68		

続いて，卒業後の進路について見る。卒業後の進路は卒業時調査における自己申告のデータを用いる。結果（表5）は，カイ2乗検定において選抜方法別の有意な差は見られなかった。

表 5 経済学部の選抜方法別卒業後の進路

	大学院進学	就職	その他	未定	無回答	合計
前期日程	2.0%	85.4%	3.5%	7.1%	2.0%	100%
後期日程	2.6%	87.2%	.0%	7.7%	2.6%	100%
推薦Ⅰ	.0%	87.5%	7.1%	1.8%	3.6%	100%
AO	13.3%	86.7%	.0%	.0%	.0%	100%
合計	2.3%	86.0%	3.6%	5.8%	2.3%	100%

3.2 選抜方法別にみる入学時と卒業時の特徴

まず，経済学部の入学時における選抜方法別の特性について確認しておく。山口大学への進学理由（図 1）で特徴的な点は，AO 入試において「アドミッション・ポリシーが自分に合っていたから」の割合が高いことである。また，後期日程において「滑り止めだった」割合が高くなっている。

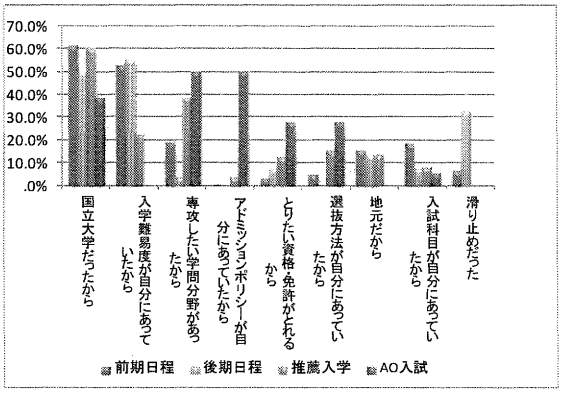

図 1　経済学部の選抜方法別大学進学の理由

※2007 年度入学者の入学時調査より。有効票は 399 票。
※2007 年度は 25 項目の中から 3 つまでの複数回答を求めた。
そのうち、経済学部全体で上位の項目のみを示した。

次に，入学時の資質・能力の自己評価（図 2）について見る。入学時の資質・能力の自己評価で特徴的な点は，AO 入試で「何事にもチャレンジ精神が旺盛である」「不明なこと，理解できないことは納得できるまで追求する」「リーダーになって集団をまとめることができる」が他の選抜方法よりも突出している点である。入学時調査にみる選抜方法別の特徴として，AO 入試による入学者がアドミッション・ポリシーをしっかりと確認して大学進学を決めていること，チャレンジ精神やリーダーシップ等，AO 入試だけに加えられているアドミッション・ポリシーに当てはまる人材として自らを評価していることをあげることができる。

続いて，卒業時の資質・能力の自己評価（表 6）について見る。卒業時の資質・能力の自己評価で特徴的な点は，AO 入試で「自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる」「自分の考えを文章を用いて的確に表現することができる」といったプレゼンテーションに関する項目の自己評価が高いことである。

表 6　経済学部の卒業時調査における選抜方法別　資質・能力についての自己評価

	前期日程	後期日程	推薦Ⅰ	AO	自由度	有意確率
自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	61.7%	71.1%	75.9%	86.7%	12	.017
自分の考えを文章を用いて的確に表現することができる	59.9%	60.5%	79.6%	100%	12	.002

※2007 年度入学者の卒業時調査より（N=194）。
※実際の質問項目は，表 7 の 24 項目それぞれに 4 段階評価で回答を求めている。表 6 は「かなりあてはまる」，「少しあてはまる」の回答を合算した値を示している。また，24 項目中，カイ二乗検定において有意な差が生じた 2 項目のみを表示した。

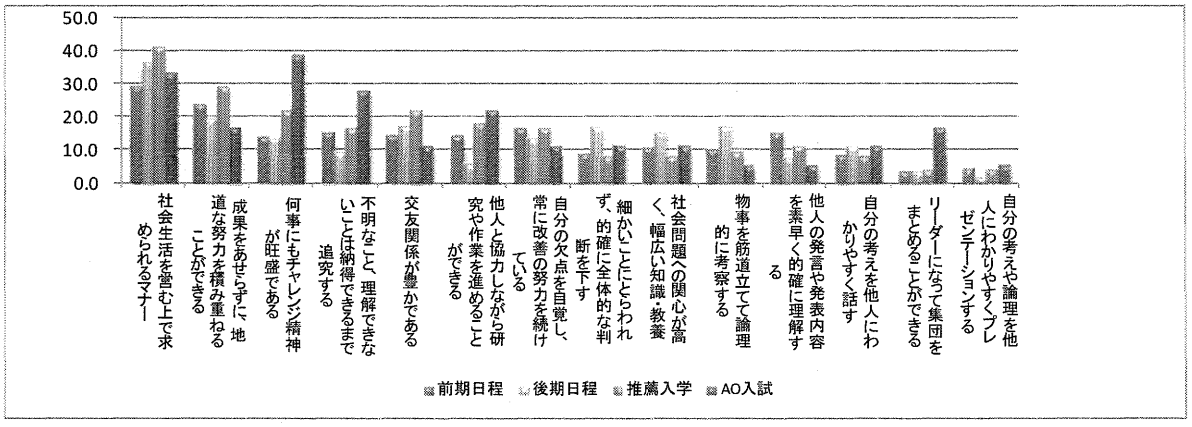

図 2　経済学部の選抜方法別 資質・能力の自己評価

※2007 年度入学者の入学時調査より。有効票は 399 票。
※2007 年度は表 7 の 24 項目の中から 3 つまでの複数回答を求めた。そのうち，経済学部全体で上位の項目のみ示した。

そこで，卒業時調査における資質・能力の自己評価について，「かなりあてはまる」4 点「少しあてはまる」3 点「あまりあてはまらない」2 点「全くあてはまらない」1 点として 24 項目の因子分析を行った。その結果 5 つの因子を抽出した（表 7）。

5 つの因子それぞれに，「論理的な問題解決能力」「積極的な人間関係の構築」「地道な努力」「自己表現力」「創造力」と名付けた。

表 7　資質・能力の自己評価の因子分析

	因子負荷量				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第 1 因子　「論理的な問題解決能力」					
他人の意見・行動に根拠ある批判ができる	.677	.141	.028	.108	.186
物事を筋道立てて論理的に考察することができる	.643	.018	.105	.290	.090
与えられた前提，条件から結論を推論することができる	.626	.070	.217	.177	.159
他人の発言や発表内容を素早く的確に理解することができる	.571	.168	.196	.267	-.090
必要とする情報や未知の知識を得るための手段や方法をよく知っている	.515	.156	.041	.170	.156
細かいことにとらわれず，的確に全体的な判断を下すことができる	.514	.222	.194	.017	.042
困難に直面したとき，冷静に打開策を見出すことができる	.491	.243	.284	.145	.179
周囲の意見や風評に流されることなく，善悪の判断ができる	.470	.212	.240	.048	-.036
新しい機器類の操作を学んだり，率先して新しい技術を覚え，必要に応じた活用が十分できる	.439	.201	.014	.127	.187
社会問題への関心が高く，幅広い知識・教養を身につけている	.361	.150	.220	.207	.190
第 2 因子　「積極的な人間関係の構築」					
交友関係が豊かである	.078	.691	.132	.076	.089
リーダーになって集団をまとめることができる	.353	.573	.143	.199	.150
何事にもチャレンジ精神が旺盛である	.176	.552	.233	.073	.354
指示されなくても，自分で判断して行動ができる	.419	.446	.370	-.008	.018
社会生活を営む上で求められるマナーが身についている	.251	.399	.293	.211	-.186
第 3 因子　「地道な努力」					
成果をあせらずに，地道な努力を積み重ねることができる	-.021	.153	.736	.073	.040
自分の欠点を自覚し，常に改善の努力を続けている	.119	.223	.521	.175	.157
周囲の雑音を気にせずに，研究や仕事に長時間取り組むことができる	.262	.008	.515	.114	.024
他人と協力しながら研究や作業を進めることができる	.159	.276	.388	.036	.004
不明なこと，理解できないことは納得できるまで追求する	.347	.195	.353	.203	.269
第 4 因子　「自己表現力」					
自分の考えや論理を他人にわかりやすくプレゼンテーションすることができる	.272	.138	.157	.789	.098
自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	.327	.384	.134	.421	.026
自分の考えを文章を用いて的確に表現することができる	.345	.076	.293	.410	.089
第 5 因子　「創造力」					
既存の概念にとらわれず，新しいものを生み出そうとする意識が高い	.396	.176	.113	.100	.686
寄与率（%）	16.62	8.97	8.89	6.14	4.11

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

（2007 年度入学者の卒業時調査より　N=194）

そして，選抜方法別に因子得点の平均点を算出したが，有意な差は見られなかった（図表省略）。つまり，卒業時の資質・能力についての自己評価は，選抜方法とは関連はないようである。

3.3 卒業時の学業成績，進路を規定する要因

では，選抜方法別に違いが生じないのであれば，大学卒業時の学業成績や卒業時の進路を規定する要因は何であろうか。これを検討するために，入試成績と卒業時の全体 GPA を一致することができ，最も母数の大きい経済学部の前期日程のみを取り上げて分析を試みる。

まず，入試成績と卒業や留年等の在籍状況は有意な差は認められなかった。また，卒業後の進路にも有意な差は認められない。つまり，前期日程だけを取り上げてみても，入試成績は入学後進級状況や卒業後の進路に関連していないと言える。

入試成績と入学後の成績との相関の分析については，選抜効果（芝祐順・渡部洋 1988）がある。選抜を通して等質化した集団で入試成績と入学後の成績との相関をとると相関係数は低くなるのだが，確認のため前期日程入学者の入試成績と在学中の GPA との関連について相関分析を試みた（表 8）。入試成績と在学中の GPA は，やはり相関係数は高くない。1 年 GPA と 2 年 GPA との相関係数が最

も高く，次いで2年GPAと3年GPAの相関係数が高い。1年次のGPAが高い人が2年次のGPAも高くなり，2年次のGPAが高い人が3年次のGPAも高くなるという流れができている。1年次に良い成績を修めることがその後の成績を決める鍵となっているようである。

表8　前期日程入学者の入試成績とGPAの相関

	入試	1年GPA	2年GPA	3年GPA	4年GPA
入試	1.000	.254**	.294**	.259**	.196**
1年GPA		1.000	.793**	.663**	.504**
2年GPA			1.000	.785**	.597**
3年GPA				1.000	.650**
4年GPA					1.000

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。
*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

次に，卒業者全体の卒業後の進路別の学業成績の平均値を求めた（表9）。卒業後の進路は1年GPAが高い者が大学院進学あるいは就職をしているのに対し，未定の者は1年GPAが低い。やはり，1年次の成績が重要になっている。

表9　卒業後の進路別学業成績

		度数	平均値	F 値	有意確率
1年GPA	大学院進学	7	3.16	5.599	.000
	就職	266	2.70		
	その他	11	2.64		
	未定	18	2.25		
	無回答	7	2.73		
	合計	309	2.68		
2年GPA	大学院進学	7	3.11	3.249	.012
	就職	266	2.51		
	その他	11	2.46		
	未定	18	2.14		
	無回答	7	2.29		
	合計	309	2.50		
3年GPA	大学院進学	7	3.02	2.330	.056
	就職	266	2.55		
	その他	11	2.48		
	未定	18	2.08		
	無回答	7	2.39		
	合計	309	2.53		
4年GPA	大学院進学	7	3.00	2.910	.022
	就職	266	3.07		
	その他	11	3.09		
	未定	18	2.25		
	無回答	7	3.67		
	合計	309	3.03		
全体GPA	大学院進学	7	3.07	3.936	.004
	就職	266	2.71		
	その他	11	2.67		
	未定	18	2.18		
	無回答	7	2.77		
	合計	309	2.69		

そして，卒業後の進路別に卒業時調査の資質・能力自己評価の因子得点平均値を求めた（表10）。「論理的な問題解決能力」「自己表現力」「創造力」は卒業後の進路による有意な差は認められないが，「積極的な人間関係の構築」，「地道な努力」は大学院進学決定者，就職決定者の因子得点が高い。つまり，この2つの因子は大学卒業時に進路を決定できるかどうかの重要な資質・能力の因子となっていると考えられる。

表10　卒業後の進路別資質・能力自己評価因子得点

		度数	平均値	F 値	有意確率
論理的な問題解決能力	大学院進学	7	0.363	0.821	0.483
	就職	252	-0.007		
	その他	11	-0.261		
	未定	17	0.119		
積極的な人間関係の構築	大学院進学	7	0.208	6.313	0.000
	就職	252	0.064		
	その他	11	-0.541		
	未定	17	-0.682		
地道な努力	大学院進学	7	0.002	5.272	0.001
	就職	252	0.061		
	その他	11	-0.298		
	未定	17	-0.715		
自己表現力	大学院進学	7	0.617	1.69	0.169
	就職	252	0.003		
	その他	11	-0.168		
	未定	17	-0.189		
創造力	大学院進学	7	0.178	0.201	0.896
	就職	252	-0.01		
	その他	11	0.112		
	未定	17	-0.001		

さらに，前期日程の学生の入試得点，在学中のGPA，5つの資質・能力の自己評価の因子，及び，これまでの予備分析でGPA等の「学業成績」の高さ，大学に対する満足度や自己評価等の「意識」の高さを規定する一つの要因であることが明らかになっている在学中の「諸活動」との相関分析を行った（表11）。諸活動については12項目の活動の有無を聞いており，その活動数の合計を用いる。

入試成績は資質・能力の因子に相関はなく，また，諸活動の活動数とも関連はない。各学

表11　前期日程入学者の入試成績，在学成績，資質・能力の自己評価及び諸活動の相関

	資質・能力自己評価の因子					活動数
	論理的な問題解決能力	積極的な人間関係の構築	地道な努力	自己表現力	創造力	
入試成績	-0.043	0.045	0.051	-0.062	0.005	.055
1年GPA	-0.014	0.021	.286**	0.028	0.017	.232**
2年GPA	-0.115	-0.006	.279**	-0.031	0.041	.188**
3年GPA	-0.116	-0.025	.269**	0.021	0.011	.193**
4年GPA	-.128*	-0.010	.164**	0.062	0.066	.073
全体GPA	-.125*	-0.010	.285**	0.031	0.047	.185**

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。
**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

年の GPA は「地道な努力」に正の相関をしている。つまり，大学に入学してからの成績が良い人ほど「地道な努力」にかかわる資質・能力を身につけていると自己評価している。そして，低年次の 1 年，2 年，3 年 GPA と諸活動の活動数が正の相関を示している。中でも 1 年 GPA の相関係数は 2 年，3 年よりも高い。諸活動の活動数が多い人ほど GPA が高くなっており，1 年次は重要と言える。

以上のことから，大学入学後の 1 年次に，諸活動に参加してネットワークを広げ，いかに地道な努力ができ，高い GPA を獲得できるかが，その後の学業成績及び卒業後の進路を決定づける鍵となっていると言える。

4 まとめ

山口大学のアドミッション・ポリシーは，選抜方法に関わらず学部ごとに共通である。ただし，AO 入試はこの共通のアドミッション・ポリシーに加えて AO 入試独自のアドミッション・ポリシーを掲げている。AO 入試独自のアドミッション・ポリシーは，共通のアドミッション・ポリシーよりも意欲やさまざまな活動の経験を求める記載になっている。特に経済学部にその傾向が顕著である。

2007 年度入学者は，入学時の意識や実態を学業成績や卒業時調査のデータと一致することができないため，入学時の資質・能力の自己評価の実態を用いてアドミッション・ポリシーとの評価をすることはできない。しかし，敢えてデータ蓄積段階での傾向を見るならば，AO 学生は他の選抜方法の学生とは明らかに違う傾向が見られ，入学時にはアドミッション・ポリシーに基づいた自己評価を行っているようである。

そして，卒業時の資質・能力の自己評価においては選抜方法による有意な差は見られなかった。このことから，卒業時の資質・能力自己評価は入学時の資質・能力の自己評価から変化していると考えられる。それは，大学教育における効果が考えられ，今後，本分析において詳細を検討したい。

また，経済学部において大学教育が最大の効果をもたらすためには，初年度教育及び 1 年次のサポートが重要であり，大学入試では，大学で諸活動に参加してネットワークを広げ，地道な努力ができる学生を獲得することも必要と言えるだろう。

学生が入学してから卒業するまでの成長の過程の把握は複雑である。しかし，以上の予備分析から，入学者の入学から卒業までの過程を把握し分析することは，より明確にかつ具体的にアドミッション・ポリシーを示すためにも，またアドミッション・ポリシーで求めた学生を確実に獲得するための入試改善を見出すためにも一つの追跡手段となりうることが示された。さらに，この追跡手法とその分析は入試改善だけでなく大学教育改善においても必要なものだと考える。

注

1) 平成 25 年 3 月に学籍番号を求める入学時調査を開始した初年度に当たる平成 21 年度の入学者の卒業時までの全てのデータが揃うことになる。

2) 山口大学では，平成 17 年 4 月入学者から成績評価を秀，優，良，可に改めた。これを用いて，GPA を次の通り算出した。

GPA＝4×秀の修得単位数＋3×優の修得単位数＋2×良の修得単位数＋1×可の修得単位数／総履修単位数（不可，放棄等含む）

参考文献

林寛子（2012），「入学区分別にみる学業成績と生活態度と卒業時の意識」『大学入試研究ジャーナル』22，79-84.

芝祐順・渡部洋（1988），『入試データの解析』，新曜社，66-72.